

宇治拾遺物語抄

下卷

三五六

2116



宇治拾遺物語抄 下卷

目次

(一)	獵師、佛を射る事	一
(二)	博打、聾入りの事	四
(三)	伴、大納言、應天門をやく事	七
(四)	吾嬬人、生贄を止むる事	十二
(五)	あをつねの事	二十四
(六)	河内、守頼信、平、忠恒をせむる事	二十七
(七)	丹後、守保昌、下向の時、致經の父に逢ふ事	三十一
(八)	穀斷ちの聖、不實露顯の事	三十二
(九)	樵夫の小童、隠し題の歌讀む事	三十三
(十)	宗行の郎等、虎を射る事	三十四

Handwritten text at the bottom of the right page.

- (十一) 遣唐使の子、虎に食はるゝ事 四十丁
- (十二) 水無瀬殿むさゝびの事 四十一丁
- (十三) 元輔落馬の事 四十二丁
- (十四) 龜を買ひてはなす事 四十五丁
- (十五) 大井光遠の妹、強力の事 四十七丁
- (十六) 念佛の僧、魔往生の事 五十一丁
- (十七) 經頼、虵に逢ふ事 五十三丁
- (十八) 珠の價、量りなき事 五十七丁
- (十九) 大將、慎みの事 六十六丁
- (二十) 清見原、天皇、大友、皇子と合戦の事 六十八丁
- (廿一) 頼時が、胡人見たる事 七十三丁
- (廿二) 賀茂祭のかへり、武正、兼行、御覽の事 七十六丁

- (廿三) 門部、府生、海賊射返す事 七十七丁
- (廿四) 後の千金の事 八十一丁

宇治拾遺物語抄 下卷

東宮 鐵眞 呂抄

(一) 獵師、佛を射る事

むかひ、あたごの山に、久しくこれなふ聖ありけり。年比行ひて、坊をいづる事なく。西のかたに、獵師あり。此の聖をたふとみて、常には、まうで、物たてまつりなどけり。久しくまわらざりければ、餌袋に、干飯など入れて、まうでたり。聖、悦びて、日比のれほつかなさなどのたまふ。その中に、およりて、のたまふやうは、この程、いみじくたふとき事あり。此の年來、他念なく、經をたもち奉りてある。あるやらん、この夜比、普賢菩薩象にのりて見えたまふ。こよひ、とまりて、拜み給へ」といひければ、この獵師よに、たふとき事に

合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が
合はるゝ之が

こそ候ふなれ。さらば、とまりて拜み奉らん」とて、とまりぬ。

さて、聖のつかふ童のあるにどふ、聖のたまふやう、いかなる事ぞや。これのれも、此の佛をば、拜みまねらせたりや」と問へば、童は、五六度ぞ見たてまつりて候ふ」といふに、獵師「我れも見たてまつる事もやある」とて、聖のうしろに、いねもせずして、起きおたり。九月廿日の事なれば、夜も長く、今やくと待つに、夜半過ぎぬらんと、思ふほどに、東の山の嶺より、月の出づるやうに見えて、嶺の嵐も、さまざまに、この坊の内、光さし入りたるやうにて、あかくなりぬ。見れば、普賢菩薩、白象に乗りて、やうくとれば、坊の前に立ち給へり。

聖なくく拜みて、いかにぬ殿は、拜み奉るや」といひければ、いかは、この童も、拜み奉るをいく、いみじうたふと」とて、獵師

思ふやう、聖は、年比、經をも、たもち讀み給へばこそ、その目ばかりに、見え給はぬ。この童、わが身などは、經のむきたるかたも知らぬに、見え給へるは、心えられぬ事なり」と、心のうちに思ひて、此の事、心みてん。これ、罪うべき事にあらずと思ひて、どがり矢を、弓につがひて、聖の、拜み入りたるうへより、さしこして、弓をつよく引き、て、ひやうと射たりければ、御胸のほどに、あたるやうにて、火をうちけつごとくにて、光りも失せぬ。谷へ、どろめきて、逃げ行くれとす。

ひじり、これは、いかにたたまへるぞ」といひて、泣きまどふ事、かざりなし。男、申しけるは、聖の目にこそ、見え給はぬ。わが罪深きものゝ目に、見え給へば、心み奉らんと思ひて、射つるなり。まことの佛ならば、よも、矢は立ち給はむ。されば、あやうき物なり」といひけり。

夜あけて、血をとめて、行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷のそこ、大いなる狸、胸より、どがり矢を射とほされて、死してふせりけり。聖なれど、無智なれば、かやうに、ほかされけるなり。獵師なれども、慮ありければ、狸を射ころし、そのほけをあらはしけるなり。

(二) 博打、聳入りの事

むかし、ばくちの子の、年若きが、目はな、一所に、とりよせたるやうにて、世の人にも似ぬありけり。ふたりの親、これ、いかにして、世にあらせんずる、と思ひて、ありける所に、長者の家に、かゝづく女のありけるに、顔よからん聳とらん、と、母の、もとめけるを傳へ聞きて、天の下の、かほよしといふ、聳にならん、とのたまふといひければ、長者よろこびて、聳にとらんとて、日をとりて、契りてけり。そのよになりて、装束など、人にかりて、月はあかよりりけれど、顔見えぬ

やうに、もてなして、ばくちども、集りてありければ、人々くれば、
えて、心にくし思ふ。

さて、よるくいくに、晝ぬ符景るべきほどになりぬ。いかせんと思ひめぐらして、ばくち一人、長者の家の、天井のほりて、ふたりねたるうへの天井を、ひくくどふみならして、いかめしく、恐ろげなる聲にて、天の下の顔よしと呼ぶ。家のうちのものども、いかなる事ぞ、聞きまどふ。聳、いみじくれちて、これのをこそ、世の人天のいたの顔よしといふと聞け。いかなる事ならんといふに、三度まで呼べば、いらへつ。これは、いかにいらへつるぞといへば、心にもあらで、いらへつるなりといふ。

鬼のいふやう、この家のむすめは、わが領して、三年になりぬるを、汝、いかに思ひて、かくは通ふぞ。といふ。さる御事とも知らで、かよ

ひ候ひつるなり。たゞ御たすけ候へといへば、鬼いとく、にくき事なり。一ことして歸らん。汝命とかたちと、いづれか惜しきといふ。聳いかにいらふべき、といふに、あうと、あうとめ、なにその御かたちぞ。いのちだにればせば、『たゞかたちを』とのたまへといへば、をいへのごとくいふに、鬼さらばすふくといふとき、聳顔をかゝへて、あらくといひて、ふしまろぶ。鬼はあよびかへりぬ。さて、顔はいかゞなりたるらんとて、指燭をさして、人々見れば、目はな、一つ所に、取りすゑたるやうなり。聳は泣きて、たゞ命とこそ申すべかりけれ。かゝるかたちにて、世の中にありては、なにかせん。かゝらざりつるさきに、顔を一たび見え奉らで、大かたは、かく恐ろしき物に、領せられたりける所に、まはりける、あやまちなり、と、かこちければ、あうと、いとほしと思ひて、このかはりに、わが

持ちたる寶を奉らんといひて、めでたくかゝづきければ、うれしくてぞありける。所のあしきか、とて、べちに、よき家をつくりて、住ませければ、いみじくてぞありける。

(三) 伴、大納言、應天門をやく事

今はむかし、水清和の尾の御門の御時に、應天門御所正門やけぬ。人のつけたるになんありける。うれを伴、善男といふ大納言、これは、信の左大臣のあわさなりと、大やけに申しければ、そのれとを罪せん、と、せさせ給ひけるに、忠仁公眞房、世の政は、御おとうどの西三條の右大臣眞相にゆづりて、白川にこもり、お給へる時にて、この事をき、れどろき給ひて、御烏帽子直垂ながら、移しの馬にのり給ひて、のりながら、北の陣までおはして、御前にまわり給ひて、この事申し、人の讒言にも侍らん。大事になさせ給ふこと、いとことやうの事なり。か

ゝる事は返すく、よくたゞしてまこと、あらはして、
こなはせ給ふべきなり」と、そうい給ひければ、まことにも、
いめして、たゞさせ給ふに、一定もなき事なれば、ゆるし給ふよ、
仰せよ」とある宣旨、うけ給ひてぞ、れとゞは、かへり給ひける。
左のれとゞは、過したる事もなきに、かゝる横さまの罪にあたる
を、れほしなげきて、日の装束して、庭にあらごもをきて、出で、
天道にうたへ申し給ひけるに、ゆるし給ふ御使に、頭中將馬の
りながら、はせまうでければ、いさぎ罪せらるゝ使ぞ、と心えて、ひ
と家泣きのゝするに、ゆるし給ふよ、仰せかけて、かへりぬれば、
又よろこび泣きおひたゞかりけり。ゆるされ給ひにけれど、大
やけにつかうまつりては、横さまの罪、いできぬべかりけりとい
ひて、こどもどのやうに、官づかへも、お給はざりけり。

この事は、過ぎに秋の比、右兵衛の舍人なるもの、東の七條に住
みけるが、つかさに参りて、夜深けて、家に歸るとて、應天門のまへ
をどほりけるに、人のけはひいて、さゝめく廊の腋に、かくれたち
て見れば、柱より、かゝぐりれるゝものあり。あやしくて見れば、伴、
大納言なり、次に子なる人れる。また次に、雑色とよ清といふもの
れる。何わざして、れるゝにかあらんと、つゆ心もえて、見るに、この
三人れりは、つるまゝに、はゝるこどかざりなり。南の朱雀門さま
に、走りていぬれば、この舍人も、家さまにゆくほどに、二條堀川の
ほど行くに、大内の方に、火あり」とて、大路のゝる見かへりて見
れば、内裏の方と見ゆ。走り歸りたれば、應天門の、なからばかり、燃
えたるなりけり。

このありつる人どもは、この火つくとて、のほりたりけるなり

と、心えてあれども、人のきはめたる大事なれば、あへて、口よりほかにいださず。そののち、左のれとゞの、おたまへる事とて、罪かうぶり給ふべし、といひのゝしる。あはれ、おたる人のあるものを、いみじき事かなと、思へど、いひいだすべき事ならねば、いとほしと、思ひありくに、れとゞゆるされぬと聞けば、罪なき事は、つひに、のがるゝものなりけり」となん、思ひける。

かくて、九月ばかりになりぬ。かゝるほどに、伴、大納言の出納の家を、さなき子と、舍人が小童と、いさかひをして、泣きのゝれば、出でゝどりさへんとするに、この出納、れなむく出でゝ見るに、よりにて、ひき放ちて、わが子をば、家に入れて、この舍人が子の髪を取りて、うちふせて、死ぬばかりふむ。舍人思ふやう、わが子も、人の子も、ともに童部いさかひなり。たゞ、さてはあらで、わが子をゝも、か

くなさけなくふむは、いとありき事なり」と、腹たゝしうて、まうどは、いかで、なさけなく、をさなきものを、かくはするぞといへば、出納いふやう、れは、何事いふぞ。とねりたつる、れは、ばかりのれほやけ人を、わがうちたらんに、何事のあるべきぞ。わが君、大納言殿のれは、しませば、いみじきあやまちを、おたりとも、何ごどのいでくべきぞ。おれ事いふかたおかな」といふに、舍人、れほきに腹立ちて、れは、何ごといふぞ。わがおうの大納言を、かうけに思ふか。れのがおうは、わが口によりて、人にて、も、れは、するは、知らぬか。わが口あけては、れのがおうは、人にては、ありなんや」と、いひければ、出納は、腹立ちさして、家に、はひ入りけり。

このいさかひを見ると、里となりの人、市をなして、聞きければ、いかにいふ事にかあらん、と思ひて、あるは、妻子にかたり、あるは

つぎく語りちらして、いひさわさければ、世にひろがりて、おほやけまで、きこしめして、舍人をめして、問はれければ、はじめはあらがひけれども、われも罪かうぶりぬべく、といひければ、ありのくだりの事を、申してけり。そののち、大納言も、問はれなどして、事あらはれての後なん、流されける。應天門を焼きて、まことの大臣に、おぼせて、かのれど、を罪せさせて、一の大納言なれば、大臣にならんと、かまへける事のかへりて、わが身つみせられけん、いかに悔いかりけん。

（四）吾嬬人生贖を止むる事

いまはむかひ、山陽道美作國に、中さん、かうやと申す神は、います。かうやは、くちなは、中さんは、猿丸にて、なんれはする。その神、年ごとの祭りに、かならず、いけにへを奉る。人のむすめの、かたちよ

く髪長く、色白く、身なりをかへげに、すがたらうたげなるをぞ、えらひもどめて奉りける。昔より、今にいたるまで、その祭り怠り侍らず。それに、ある人の女、いけにへに、さへあてられにけり。親ども泣き悲しむ事、かぎりなし。人のれや子となる事は、さきの世のちぎりなりければ、あやしきをだに、おろかにやは思ふ。まいて、よろづに、めでたければ、身にもまさりて、たろかならず思へども、さりとて、のがるべからねば、歎きながら、月日を過すほどに、やうく命つゝまるを、れや子と、逢ひ見ん事、いまいくばくならず、と思ふに、つけて、目をかぞへて、明け暮れは、たゞ、ねをのみ泣く。かゝるほどに、あづまの人の、狩といふ事をのみ役として、猪のいよといふものゝ、腹立ちあかりたるは、いと恐ろしきものなり。それをだに、何とも思ひたらず、心にまかせて、殺しとりくふ事を、や

くとするものゝいみじう、身の力つよく、心たけく、むくつけきあら武者の、れのづから出でてきて、そのわたりに、たちめぐる程に、この女の父母のもとに來にけり。物がたりするついでに、女の父のいふやう、れのれがむすめの、たゞひとり侍るをなん、かうくのいけにへに、さゝあてられ侍れば、思ひくらし、なげき明してなん、月日を過し侍る。世には、かゝ事も侍りけり。さきの世に、いかなる罪をつくりて、この國に生れて、かゝるめを見侍るらん。かの女子も、心にもあらず、あさましき死にを、お侍りなんずるかなと申す。いとあはれに、悲しう侍るなり。さるは、れのれが女ども申さじ、いみじうつくしげに侍るなり」といへば、あづまの人、さて、その人は、いまは死にたまひなんずる人にこそ、れはすれ。人は、命にまさる事なく、身のためこそ、神もれをろしけれ。このたびのいけに

へを出さずして、その女君を、みづからにあづけたふべし、死に給はんも、同じ事にこそ、れはすれ。いかでか、たゞひとり、持ちたてまつり給へらん御女を、めのまへに、いきながら、なますにつくり、切りひろげさせては、見給はん。ゆゝゝかるべき事なり。さるめ見給はんも、同じ事なり。たゞその君を、われにあづけ給へど、ねんころいひければ、げに、目のまへに、ゆゝゝきさまにて、死なんを見んよりは、とて、取らせつ。

かくて、あづま人、この女のもとに行きて見れば、かたち姿をかへげなり。あいきやうめでたし。物思ひたるすがたにて、よりふして、手ならひをするに、なみだの、袖のうへにかゝりて、ぬれたり。かゝるほどに、人のけはひのすれば、髪を顔にふり、かくるを見れば、髪もぬれ、顔もなみだにあらはれて、思ひ入りたるさまなるに、人の

きたれば、いとゞ、つゝまゝに思ひたるけはひして、すこゝそぼむきたる姿まことに、らうたげなり。凡て、けだかく、あなぐゝうをかゝげなる事、田舎人の子といふべからず。あづま人、これを見るに、悲しき事、いはんかたなし。されば、いかにもく、わが身なくならばなれ。たゞこれにかはりなんと思ひて、此の女の父母にいふやう、思ひかまふる事こそ侍れ。もゝこの君の御事によりて、ほろひなどお給はゞ、くるゝとやればさるべきと問へば、このため、みづからは、いたづらにもならばなれ。さらに苦くからず、生きても何にかは、お侍らんずる。たゞおぼされんまゝに、いかにもく、おたまへといらふれば、さらば、この御祭りの御きよめするあり、とて、しめ引きめぐらして、いかにもく、人な寄せ給ひを、またこれに、みづから侍り、とな人にゆめく、知らせ給ひを、といふ。

さて、日比こもりおて、此の女房と、おもひすむこといみじ。かゝるほどに、年ごろ、山につかひならはしたる犬の、いみじきなかた、かゝるこきを、二つえりて、それに、いきたる猿丸を捕へて、明けくれ、やゝく、と、食ひ殺させてならはす。さらぬだに、猿丸と犬とは、かたきなるに、いと、かうのみ、ならはせば、猿を見ては、をどりかゝりて、食ひ殺す事限りなし。さて、明けくれは、いらなき太刀を、みがき、刀をどぎ、劔をまうけつゝ、たゞ、このめの君と、ことぐさにするやう、「あはれ、さきの世に、いかなる契りをして、御命にかはりて、いたづらになり侍りなん、とすらん。されど、御かはりと思へば、いのちは、さらに惜くからず。たゞ、別れきこえなんす、と思ひ給ふるが、いと、心ほそく、あはれなる。などいへば、女も、まことに、いかなる人の、かくれば、して、思ひものゝ給ふにか、といひつゝ、けられて、悲しうあ

はれなる事いみじ。

さて過ぎ行くほどに、その祭りの日になりて、宮づかさよりはじめ、よろづの人々、こぞり集りて、迎へにのより來て、あたらしき長びつを、この女の、ゐたる所に、さゝ入れていふやう、例のやうに、これに入れて、その生贄いだされよといへば、このあづま人、たゞこのたひの事は、みづからの申さんまゝに、ゑたまへとて、此のひつに、みそかに入りふして、左右のをばに、この犬どもを、どり入れて、いふやう、れのれら、この日比、いたはりかひつるかひありて、此のたひの、わが命にかはれ、れのれらよといひて、かき撫づれば、うちうめきて、わきに、かいそひて、みなふしぬ。また、日ごろ、どきみがつきつる太刀刀、みな取り入れつ。さて、ひつのふたを、れほひて、布いてゆひて、封つけて、わがむすめを入れたるやうに思はせて、さゝ

出したれば、梓、神、鈴、鏡をふり合せて、さきれひのよりりて、もて参るさま、いどいみじ。さて、女、これを聞くに、われに代りて、この男のかく、いて、いぬるこそ、いとあはれなれ、と思ふに、また、無爲ふゐに、事いでこば、わが親たち、いかれはせん、ど、かた／＼に、なげきおたり。されども、父母のいふやうは、身のためこそ、神も佛も、れそろいけれ。死ぬる事なれば、今は、恐ろしき事もなし。同じ事を、かくてをなくなりなん。今は、ほろびんも、くるしからず、といひわたり。かくて、いけにへを、御社にもてまわり、神主、祝詞いみじく申して、神のれまへの戸をあけて、この長櫃をさゝ入れて、戸をもとのやうにさして、それより外のかたに、宮づかさをはじめて、次々の司ども、次第に、みなならびわたり。さるほどに、この櫃を、刀のさきいで、みそかに穴をあけて、あづま人見ければ、まことにて、えもいはず

大きな猿のたけ七八尺ばかりなる、顔と尻とは赤くして、むら綿わたわたをきたるやうに、いらなく白きが、毛はれひあがりたるさまにて、よこ座よこざにわたりつぎくの猿ども、左右に、二百ばかりなみなて、さまざまに、顔を赤くなく、眉をあげ、こゑづくに、鳴きさけひのゝいる。いと大きなるまな板に、長やかなる庖丁刀を具して、置きたり。めぐりには、酢酒、おほ入りたる瓶どもな、めり、と見ゆる、あまた置きたり。

さて、おぼしばかりあるほどに、このよこ座にわたるれば、猿より来て、長櫃のゆひ緒をときて、ふたをあけんとすれば、次々猿ども、みな寄らんとするほどに、この男、犬どもくらへ、おれのといへば、二つの犬をどりいで、中に大きなる猿をくひてうちふせて、ひきはりて、食ひ殺さんとするほどに、此のをとこ、髪をみだりて、櫃

より、をどりいで、氷のやうなる刀をぬきて、その猿を、まな板のうへに、ひきふせて、くひに刀をあて、いふやう、おれのれが、人のいのちをたち、そのおむらむらを食ひなどする物は、かくぞある。おのづから、うけたまはれ。たしかに、や首切りて、犬にかひてんといへば、顔を赤くなくして、目をおぼたきて、齒を眞白にくひ出して、目より、血のなみだを流して、まこと、あさましき顔つきして、手をすり、悲しめども、さらにゆるさずして、おのれが、そこばくの多くの年ごろ、人の子どもをくひ、人のたねをたつかはり、おぼやくひ切りて捨てん事、たゞ今にこそあめれ。おのれが身みさらば、我れを殺せ。さらに苦しからずと、いひながら、さすがに、首をば、とみにきりやらず。さるほどに、この二つの犬どもに、おはれて、多くの猿ども、みな木の上うへに逃げのほり、まどひさわぎ、さけひのゝいる

に、山もひゞきて、地もかへりぬべし。

かゝるほどに、一人の神主に、神つきていふやうにけふより後、さら
に、この生贄をせむ。ながくとゞめてん。人を殺す事、こりども
懲りぬ。いのちをたつ事、今より、永く、お侍らむ。また我をかく爲つ
とて、この男、どかくし、また、けふの生贄にあたりつる人のゆかり
を、領しわづらはすべからず。あやまりて、その人の子孫のすゑず
ゑにいたるまで、我れまもりとならん。たゞ、どくく、此のたひわ
が命をこひうけよ。いと悲し。われを助けよ。とのたまへば、官司、神
主よりはむめて、多くの人ども、れどろきをなして、みな、社のうち
に入りたちて、さわざあわて、手をすりて、ことわりれのづから
さぞ侍る。たゞ、御神にゆるし給へ。御神も、よくぞ仰せらる。と、い
へるも、このあづま、人、さなゆるされ。人のいのちをたち殺すも

のなれば、きやつに、ものゝわひわらひししと知らせん、と思ふなり。我が身
こそあなれ。たゞ、殺されん。くるしからず、といひて、さらに、ゆるさ
ず。

かゝるほどに、この猿のくひは、切りはなたれぬ、と見ゆれば、宮づ
かさも手まどひして、まことに、すべき方なければ、いみじきちか
言どもをたて、祈り申して、今よりのちは、かゝる事、さらに、く
すべからず。など、神もいへば、さらば、よしく。今より後は、かゝる
事なせ。といひふくめて、ゆるしつ。さて、それより後は、すべて、人
をいけにへにせず、なりけり。さて、その男、家に歸りて、いみじう、
男女あひ思ひて、年ごろの妻夫になりて、すぐけり。男は、もとよ
り、ゆゑありける人のすゑなりければ、くちをいからぬさまにて
侍りけり。その後は、かの國に、猪鹿をなん、いけにへに、おはべりけ

るとぞ。

（五）あをつねの事

今はむかし村上の御時、古き宮の御子にて、左京大夫なる人おは
 けり。長すこし細たかにて、いみじうあてやかなる姿は、いたれ
 ども、やうだいなど、をこなりけり。かたくなは、き様ぞ、いたり
 ける。頭のおふみが、いらなりければ、えいは、せなかにもつかず、は
 なれてぞふちれける。色は露草のはなをぬりたるやうに、青白に
 て、まかぶらくほく、鼻のあざやかに高く赤し。口ひる薄くて色も
 なく、あめば齒がちなるもの、齒肉赤くて、ひげも赤くて、長かり
 けり。聲は、はな聲にて、高くて、物いへば、一うち響きて聞えける。歩
 めば、身をふり、おりをふりてぞありきける。色のせめて青かりけ
 れば、あをつねの君とぞ、殿上の君達は、つけて笑ひける。若き人た

殿上人ト云フ

清涼殿中、候上階ト云フ之の所、殿上人ト云フ

三位以上上座ト云フ

四位五位内ニテ同殿ト云フ

ちの、たちおにつけて、やすからず笑ひの、りりければ、みかど、聞
 けり。父のみこ聞きて、制せずとて、我れをうらみざらんや、など、仰せ
 られて、まめやかに、さいなみ給へば、殿上の人々、おたなきを、して、
 みな笑ふまじきよし、いひあへりけり。さて、いひあへるやう、かく
 さいなめば、今より、ながく起請すも、かく起請してのち、あをつ
 ねの君と、よひたらんものを、酒、くだ物など、取りいださせて、あ
 がひせんと、いひかためて、起請して後、いくほくもなく、堀河殿
 の、殿上人にておはしけるが、あふなく、立ちてゆくうしろで、を見
 て、わすれて、あのおをつねまるは、いづちゆくぞ、のたまひてけ
 り。殿上人ども、かく起請を破りつるは、いとひんなき事なりとて、
 いひ定めたるやうに、すみやかに、酒、くだ物、どりにやりて、この事

あがへ」とあつまりて、せめのよりければ、あらがひて、せむとす
まひけれど、まめやかに、せめければ、さらばあさてばかり、青つね
の君あがひせん。殿上人、藏人、うの日あつまり給へ」といひて、出で
給ひぬ。うの日になりて、堀河中將殿の、青つねの君のあがひすべ
し、とて、まわらぬ人なく。殿上人おならひて、待つほどに、堀河中將
直衣すがたにて、かたちは、光るやうなる人の、香は、えもいはず、か
うばく、あいさやう、こぼれにこぼれて、参り給へり。直衣の、なが
やかに、めでたきすうより、青き打ちたる、いだえ袖して、さくぬき
も、青いろのさくぬきをきたり。隨身三人に、青き狩衣はかまきせ
て、ひとりには、青く色どりたるを、ききに、青ちのさらけ、こくはを
盛りて、さくげたり。いま一人は、竹の枝に、山鳩を、四つ五つばかり、
つけて持たせたり。又一人には、青ちのかめに、酒を入れて、青きう

すやうにて、口をつくみたり。殿上の前に、もちつゝきて出でたれ
ば、殿上人ども見て、もろ聲に、笑ひとよむ事、たひたゞ。御門きか
せ給ひて、なに事を、殿上に、たひたゞく聞ゆるは、と問はせ給へ
ば、女房、兼通が、青つねよびてさぶらへば、その事によりて、をのこ
どもにせめられて、うの罪あがひ候ふを、笑ひ候ふなり」と申しけ
れば、いかやうに、あがふぞとて、ひのたまに、出でさせ給ひて、小
菰よりの、ぞかせ給ひければ、我れよりはじめて、ひた青なる装束
にて、青きくひ物どもを持たせて、あがひければ、これを笑ふなり
けり、と御覽じて、え腹たゞせ給はで、いみじう笑はせ給ひけり。う
の後は、まめやかに、さいなむ人も、なかりければ、いよくなん、笑
ひあざけりける。

(六) 河内守頼信、平忠恒をせむる事

むかへ、河内守頼信、上野守にてありし時、坂東に平忠恒といふ兵ありき。仰せらるし事なきがごとくにする。討たんとて、多くの軍れこして、かれがすみかの方へ行きむかふに、入海のはるかたさへ入りたるむかひに、家をつくりておたり。この入海を、まはるものならば、七八日にめぐるべし。すぐに渡らば、その日の中にせめつべければ、忠恒、わたりの舟どもを、みな取りかくしてけり。されば、わたるべきやうもなし。濱はたにうち立ちて、この濱のまゝに、めぐるべきにこそあれ、と、兵ども思ひたるに、上野守のいふやう、「この海のまゝに廻りてよせば、日比へなん。その間に、逃げも、また寄せられぬかまへもせられなん。けふのうちによせてせめんこそ、あのやつは、存外にして、あわてまどはんずれ。ちかると、舟どもは、みなとりかくしたる、いかゞはすべき」と、軍どもに、問はれけ

るに、軍ども、「さらば、渡し給ふべきやうなし。廻りてこそ、寄せさせ給ふべく候へ」と、申しければ、此の軍どもの中に、さりども、この道知りたるものはあるらん。頼信は、坂東方は、このたびこそ、はじめに見れ。されども、我が家のつたへにて、聞ききたる事あり。この海の中には、堤のやうにて、ひろさ一丈ばかりして、すぐに渡りたる道あるなり。深さは、馬のふとばらにたつときく。この程にこそ、その道は、あたりたるらめ。さりども、この多くの軍どもの中に、知りたるもあるらん。さらば、さきにたちてわたせ。頼信つゞきて渡さん」とて、馬をかきはやめて、よりければ、知りたるものにやありけん、四五騎ばかり、馬を海にうちれろして、たゞわたりにわたりければ、それにつきて、五六百騎ばかりの軍ども、わたしけり。まこと、馬のふと腹にたちて渡る。れほくの兵どもの中に、たゞ三人

ばかりぞ、この道は知りたりける。残りは、つゆも知らざりけり。きく事だにもなかりけり。然るに、この守殿、この國をば、これこそは、じめにてはするに、我れには、これの重代のものどもにてあるに、聞きだにもせず、知らぬに、かく知り給へるは、げに人にすぐれたる、兵の道かな。と、みなさゝやきれぢて、わたり給ふほどに、忠恒は、海をまはりてぞ、よせ給はんずらん。舟は、みな取りかくしたれば、浅みちをば、我ればかりこそ知りたれ。すぐには、え渡り給はじ。濱をまはり給はん間には、どかくも、逃げもしてん。さうなくは、えせめ給はじ」と思ひて、心静かに、軍をろへておたるに、家のめぐりなる郎等、あわて走りきていはく、上野殿は、この海の中に、浅き道の候ひけるより、多くの軍を引き具して、すでに、こゝへ來給ひぬ。いかゞせさせ給はんと、わなゝき聲に、あわてゝいひければ、忠

恒、かねての志たくにたがひて、我れ、すでに攻められなんぞ。かやうに、ちたてまつらん」といひて、たちまちに、みやうぶを書きて、ふみはさみにはさみて、さゝ上げて、小舟に、郎等一人のせて、持たせて、迎へて参らせたりければ、守殿見て、かの名簿（ミヤウブ）を受けとらせていはく、かやうに、名簿に、怠りぶみをそへて、いさす。すでにきたれるなり。されば、あながちに攻むべきにあらず。とて、この文をとりて、馬を引きかへしければ、軍ども、みな歸りけり。その後より、いと、守殿（は兼）をば、ことにすぐれて、いみじき人に、れはゝます。と、いよいよいはれ給ひけり。

(七) 丹後守保昌、下向の時、致經の父に逢ふ事

これも、今はむかひ、丹後守保昌、國へくだりける時、與佐の山に、白髪（ハクシ）の武士一騎あひたり。路のかたはらなる木の下に、うち入りて

立ちたりけるを、國司の郎等ども、この翁など、馬よりれりざるぞ。奇怪なり。どがめれろすべしといふ。爰に、國司のいはく、一人當千の馬の立てやうなり。たゞにはあらぬ人ぞ。咎むべからずと、せいして、うちすぐるほどに、三町ばかり行きて、大矢の左衛門尉致經、數多の兵をぐいてあへり。國司會釋する間、致經がいはく、爰に、老者一人逢ひ奉りて候ひつらん。致經が父、平五大夫に候ふ。堅固の田舎人にて、子細を知らず、無禮を現し候ひつらんといふ。致經過ぎてのち、さればこそとぞ、いひける、とか。

(八) 穀斷ちの聖、不實露顯の事

むかひ、久しくおこなふ上人ありけり。五穀をたちて、年來になりぬ。御門きこしめして、神泉院にあらめすゑて、ことに尊み給ふ。木の葉をのみ食ひける。物笑ひする若公達あつまりて、この聖の心

見んとて、行きむかひて見るに、いとたふとげに見ゆれば、穀斷ち、いく年ばかりになり給ふと、とはれければ、若きより、たち侍れば、五十餘年にまかりなりぬと、いふを聞きて、一人の殿上人のいはく、穀斷ちの屎は、いかやうにかあるらん。例の人には、かはりたるらん。いで行きて見んといへば、二三人つれて、行きて見れば、穀屎を、多く痢りおきたり。あやしと思ひて、上人の出でたるひまに、おたるいたを見んといひて、たゞみの下を、引きあけて見れば、土をすこしほりて、布袋に、米を入れておきたり。公達見て、手をたゞきて、穀糞聖くど、よばはりて、のゝり笑ひければ、逃げ去りにけり。そののちは、ゆきがたも知らず、ながく失せにけり、となん。

(九) 樵夫の小童、隠し題の歌讀む事

今はむかひ、かくし題を、いみじく興せさせ給ひける御門の、ひち

りきをよませられけるに、人々わろくよみたりけるに、木こる童の、あかつき山へ行くどて、いひける、この比、ひちりきをよませさせ給ふなるを、人の、えよみ給はさんなる。童ころよみたれ」といひければ、ぐうて行く童部、あな、おふけなきことないひう。さまにも似ず、いまくく」といひければ、などか、かならず、さまに似る事か」とて、

めぐりくる春々どに、さくらばな、

いくたひちりき、人にとはッや。

ど、いひたりける。さまにも似ず、思ひかけずぞ。

(十) 宗行の郎等、虎を射る事

今はむか、壹岐守宗行が、郎等を、はかなき事によりて、主の殺さんとおければ、小舟にのりて、逃げて、新羅國へわたりて、かくれて、

おたりけるほどに、新羅のきんかいといふ所の、いみじうのよりさわぐ、なに事ぞ」と問へば、虎の、こふに入りて、人をくらふなり」といふ。この男問ふ、虎は、いくつばかりあるぞ」と、たゞ一つあるが、にはかに出でてきて、人をくらひて、逃げていきくするなり」といふをきして、この男のいふやう、あの虎にあひて、一矢を射て、死なばや。虎かこくば、共にこそ死なぬ。たゞ空うは、いかでか、くらはれん。此の國の人は、兵の道わろきにこそはあめれ」といひけるを、人きして、國の守に、かうくの事をこそ、この日本人申せ」といひければ、かこき事かなよべ」といへば、人きて、めあり」といへば、まわりぬ。

「まことや。此の虎の、人くふを、やすく射んとは申すなり」と、おはれければ、おか申し候ひぬ」と答ふ。守、いかで、かゝる事をば申すぞ」

と問へば、この男の申すやう、この國の人は、我が身をば、またくして、敵を害せんと思ひたれば、たほろけにて、かやうのたけき獸などには、わが身の損せられぬべければ、まかりあはぬにこそ候ふめれ。日本の人は、いかにも、わが身をば、なきになして、まかりあへば、よき事も候ふめり。弓矢にたづさはらんもの、何にかは、わが身を思はんことは候はん」と申しければ、守、さて、虎をば、かならず射殺してんや」といひければ、わが身の、生き生かすは知らず、かならず、かれをば、射とり侍りなん」と申せば、いとみじう、かゝこき事かな。さらば、かならず、かまへて射よ。いみじきよろこびせん」といへば、をのこ申すやう、さて、いづくに候ふぞ。人をば、いかやうにてくひ侍るぞ」と申せば、守のいはく、いかなるをりにかあるらん、こふの中に入りきて、人ひとり、頭をくらひて、肩にうちかけて

去るなり」と、この男、申すやう、さて、いかにしてか、くひ候ふ」と問へば、人のいふやう、虎は、まづ、人をくはんとては、猫のねずみをうかゝふやうに、ひれふして、志ばしばかりありて、大口をあきて、とひかゝり、頭をくひて、肩にうちかけて、走り去る」といふ。

「とても、かくても、さばれ、一矢射てこそは、くらはれ侍らぬ。その虎のありどころを教へよ」といへば、これより西に、卅四町のきて、をの畠あり。それになん、ふすなる。人れぢて、あへて、そのわたりに行かず」といふ。これのれ、たゞ、知り侍らずとも、そなたをさしてまからん」といひて、調度れひていぬ。新羅の人々、日本の人は、はかなし。虎にくはれなん」と集りて、そゝりけり。かくて、この男は、虎のありどころ、とひきゝて、行きて見れば、まことに、畠はるゝとれひわたりたり。をのたけ、四尺ばかりなり。その中を、わけ行きて見れば、ま

こと虎ふたり。どがり矢をはげて、片膝をたてゝおたり。虎、人の香をかぎて、ついひらがりて、猫の鼠うかゞふやうにてあるを、そのこ、矢をはげて、れどもせでぬたれば、虎、大口をあきて、をどりて、をのこのうへにかゝるを、をのこ、弓をつよくひきて、うへにかゝるをりに、やがて、矢をはなちたれば、れどがひのゝたより、うなむに、七八寸ばかり、どがり矢を射出しつ。虎、さかさまにふして、倒れてあがくを、かりまたをつがひ、二たひ腹を射る。二たひながら上に射付けて、つひに殺して、矢をもぬかて、國府にかへりて、守にかうく、射殺しつるよし、いふに、守、かんじのゝりて、多くの人をぐして、虎のもとへ行きて見れば、まことに、箭三つながら、射とほされたり。見るにいとみじ。

「まことに、百千の虎れこりて、かゝるとも、日本の人、十人ばかり、馬

にてれゝむかひて射ば、虎、何わざをかせん。この國の人は、一尺ばかりの矢に、錐のやうなる矢じりをすげて、それに、毒をぬりて射れば、遂には、その毒のゆゑに死ぬれども、たちまちに、その庭に射ふする事は、えせず。日本人は、わが命死なんをも、つゆ惜まず、大きな矢にて射れば、その庭に射殺しつ。なほ、兵の道は、日本の人には、あたるべくもあらず。されば、いよく、いみじう恐ろしくれば、ゆる國なり」とて、おちけり。さて、このをのこをば、なほ惜みとゞめて、いたはりけれど、妻子をこひて、筑紫に歸りて、宗行がもとに行きて、うの由を語りければ、日本のおもて起したるものなり」とて、勘當もゆるしてけり。多くの物ども、祿に得たりける、宗行にも取らす。多くの商人ども、新羅の人のいふをきゝて、語りければ、つくしにも、この國の人の兵は、いみじきものぞ、おけるとか。

(十一) 遣唐使の子、虎に食はるゝ事

今はむかゝ遣唐使にて、もろこゝにわたりける人の、十ばかりなる子を、え見であるまじかりければ、ぐゝてわたりぬ。さて、ずぐゝけるほさに、雪のいとたかくふりたりける日、ありきもせておたりけるに、このちごの、遊びに出で、いぬるが、れそくかへりければ、あやゝと思ひて、いでゝ見れば、足がた、うゝろのかたからふみて、行きたるにそひて、大きな犬の足がたありて、それより、此のちごの足がた見えず。山さまにゆきたるを見て、これは、虎のくひていきけるなめり、と思ふに、せんかたなく、悲しく、太刀をぬきて、足がたをたづねて、山のかたに行きて見れば、岩屋の口に、このちごを食ひ殺して、腹をねぶりてふせり。
太刀をもちて、はゝりよれば、え逃げて、もいかで、かいかゞまりて

おたるを、頭をうてば、鯉のかゝらをわるやうにわれぬ。つぎに、また、そばさまに、くはんとて、はゝりよるせなをうてば、せほねをうちきりて、くたゝとなくつ。さて、子をば、死にたれども、わきにかいはさみて、家に歸りたれば、その國の人々、見て、れちあさむ事かざりなく。もろこゝの人は、虎にあひて、逃ぐる事だにかたきに、かく虎をばうちころゝて、子をとりかへて來たれば、もろこゝの人は、いみじき事にいひて、なほ、日本の國には、兵のかたは、ならびなき國なりと、めでけれど、子死にければ、なににかはせん。

(十二) 水無瀬殿むさゝびの事

後鳥羽院御時、水無瀬殿に、よるゝ、山より、からかさほどの物の、ひかりて、御堂へ飛び入る事侍りけり。西れもて、北れもてのものども、めんゝに、これを見あらはして、高名せんと、心にかけて、用

心一侍りけれども、むなくくてのみ、過ぎけるに、ある夜、景かた、たゞひとり、中島に、ねて待ちけるに、例のひかり物、山より、池のうへを飛び行きけるに、れきんも心もとなくて、あふのきねながら、よく引いて射たりければ、手ごたへして、池へ落ち入る物ありけり。そののち、人々につけて、火をともして、めんく見ければ、ゆゑしく大きなるむさゝひの、年ふり、毛などもはげう、とげなるにてぞ侍りける。

(十三) 元輔落馬の事

今はむかへ、歌よみの元輔、くらの助になりて、かも祭の使ひ、まけるに、一條大路わたりけるほどに、殿上人の、車多くならべたて、物見ける前わたるほどに、れいらかたては渡らで、人見たまふにと思ひて、馬をいたくあふりければ、馬くるひて落ちぬ。年老たる

ものゝ頭をさかさまにて落ちぬ。公たち、あないみじ、と見るほどに、いととくれきぬれば、がぶりぬげにけり。もとよりつゆなく、たゞ、ほどぎをかづきたるやうにてなん、ありける。馬ぞひ、手まどひをして、かぶりをとりて、きせさすれど、うしろさまにかきて、あな、さわがし。まぼし待て。公達にきこゆべき事ありとて、殿上人どもの、車の前に、あゆみよる。目のさしたるに、頭きらしくといて、いみじう見ぐるし。大路のもの、市をなして、笑ひのゝしる事かぎりなり。

車、さじきのものども、笑ひのゝしるに、一の車のかたさまに、あゆみよりていふやう、公たち、この馬より落ちて、かぶりれどしたるをば、をこなりとや、思ひ給ふ。まか思ひたまふまじ。その故は、心ほせある人だにも、物につまづきたふるゝ事は、常の事なり、まゝして

馬は心あるものにあらず。この大路は、いみじう石たかく。馬は口をはりたれば、歩まんと思ふだに、歩まれず。どひき、かうひき、くるめかせば、たふれんとす。馬をあーと思ふべきにあらず。から鞍は、さらなるあぶみの、かくうけ敷べくもあらず。それに、馬はいたくつまづけば、落ちぬ。うれわろからず。また、かぶりのれつる事は、物ゝてゆふものにあらず。髪をよくかき入れたるに、とらへらるゝものなり。それに、ひんは失せにたれば、ひたふるになし。されば、落ちん事、かぶりうらむべきやうなし。又、例なきにあらず。何のれとゞは、大嘗會の御禊にれつ。なにの中納言は、その時の行幸に落つ。かくのごとくの例も、かんがへやるべからず。なれば、案内も知り給はぬ。このごろの若き君たち、笑ひ給ふべきにあらず。笑ひ給はゞ、をこなるべしとて、車ごと、手ををりつゝ、かぞへて、いひきか

す。

かくのごとくいひはてゝ、かぶり持てこといひてなん、取りてさし入れける。その時に、とよみて、笑ひのゝゝる事、かぎりなし。かぶりせさすどて、よりにて、馬ぞひのいはく、落ちたまふすなはち、かぶりをたてまつらで、など、かく、よゝなしことば、仰せらるゝぞと、どひければ、おれごとなひを、かく、道理をいひきかせたらばこそ、此の公達は、後々にも笑はさらめ。さらずば、口さがなき公たちは、ながく笑ひなんものをやとぞいひける。人わらはすること、やくにするなりけり。

十四 龜を買ひてはなす事

むかひ、天然の人たからを買はんために、錢五十貫を、子に持たせてやる。大なる河のはたをゆくに、舟にのりたる人あり。舟のかた

を見やれば、舟より龜、くびをさし、いたたり。錢もちたる人、たちとまりて、この龜をば、何のれうぞとてへば、殺して、物にせんずるといふ。うの龜、買はんといへば、この舟の人はいはく、いみじき大切の事ありて、まうけたる龜なれば、いみじきあたひなりとも、うるまじきよきをいへば、なほ、あながちに、手をすりて、この五十貫の錢にて、龜を買ひ取りて、放ちつ。

心に思ふやう、親の、たから買ひに、どなりの國へやりつる錢を、龜にかへてやみぬれば、親、いかに腹たち給はんずらん。さりて、また、親のもとへいかであるべきにあらねば、親のもとへかへり行くに、道に、人のおていふやう、こゝに、龜うりつる人は、このいものわたりにて、舟うちかへして死ぬとなん、かたるを聞きて、親の家に歸りゆきて、錢は龜にかへつる由、語らはんと思ふほどに、親の

いふやう、何とて、此の錢をば、返してせたるぞと問へば、子のいはく、さる事なし。その錢にては、いかん、龜にかへて、ゆるいつれば、その由を申さんとて、まわりつるなりといへば、親のいふやう、くろき衣きたる人、れなじやうなるが五人、れのく十貫づゝ持ちてきたりつる、これ、そなりとて、見せければ、この錢、いまだ、ぬれながらあり。はや、買ひて、放つる龜の、その錢、河に落ち入るを見て、とりもちて、親のもとに、子の歸らぬさきにやりけるなり。

(十五) 大井光遠の妹、強力の事

今はむかひ、甲斐國の相撲、大井光遠は、ひきふとに、いかめしく、力つよく、足はやく、みめことがらよりは、むめて、いみじかり、相撲なり。それが妹に、年廿六七ばかりなる女の、みめことがら、けはひもよく、姿もほそやかなるありけり。うれば、のきたる家に住みけ

るに、それが門に、人にれはれたる男の、刀をぬきて、はり入りて、この女を、おちにどりて、腹に刀をさしあてし居ぬ。人はり行き、て、せうとの光遠に、姫君は、質にとられ給ひぬ」と、つけければ、光遠がいふやう、そのおもとは、薩摩の氏長ばかりこそは、おちに取らぬといひて、なにとなくておたれば、つけつるをのこ、あやうと思ひて、たちかへりて、物よりのぞけば、九月ばかりの事なれば、薄色の衣一重に、紅の袴をきて、口をほひしておたり。男は大きなをのこの、恐ろげなるが、大の刀を、さか手にどりて、腹にさしあて、足をもて、うしろより、いだきておたり。

この姫君、左の手しては、顔をふたぎで泣く。右の手しては、前に、矢筈のあらつくりたるが、二三十ばかりあるを取りて、手ずさみに、節のもどき、指にて、板敷にれしあてし、にむれば、朽木のやはらかな

なるを、れしくたくやうに、くだくるを、このぬす人、目をつけて見るに、あさましくなりぬ。いみじからんせうとのぬしかな。槌をもちて、打ちくだくとも、かくはあらじ。ゆくしかりける力かな。このやうにては、たと今のままに、われは、とりくだかれぬべし。むやくなり。逃げなん」と思ひて、人めをはかりて、とひいでし、逃げはしる時に、すゑに、人ども走りあひてとらへつし、はりて、光遠がもとへ、くして行きぬ。

光遠、いかに思ひて、逃げつるぞと問へば、申すやう、大きな矢筈の節を、朽木などのやうに、れしくたき給ひつるを、あさましく思ひて、恐ろしさに、逃げ候ひつるなりと、申せば、光遠、うち笑ひて、「いかなりとも、その御もとは、よもつかれじ。つかんとせん手をして、りて、かいねぢて、かみさまへつかば、肩の骨は、かみさまへ出でし、

ねぢられなまゝ。かゝこく、れのれが、かひなぬかるまじき宿世ありて、御もとは、ねぢざりけるなり。光遠だにも、れのれをば、手ごろゝに殺してん。かひなをばねぢて、腹むねを踏まんに、れのれは生きてんや。それにかの御もとの力は、光遠二人ばかり合せたる力にて、たはするものを。さこそ、ほそやかに、女めかゝくれはすれども、光遠が、手たはぶれするに、とらへたるうでを、とらへられぬれば、手ひろごりて、ゆるゝつべきものを。あはれ、をのこ子にてあらまゝかば、あふかたきなくて、ぞあらまゝくちをゝく、女にてあるといふをきくに、このぬす人、死ぬべき心ちす。女と思ひて、いみじきおちを取りたると思ひて、あれども、その儀はなし。れのれをば、殺すべけれども、御もとの死ぬべくばこそ、殺さぬ。れれ、死ぬべかりけるに、かゝこう、とく逃げてのきたるよ。大きな鹿の角を、膝

にあてゝ、ちひさきから木の細きなどを折るやうに、折るものをとて、追ひ放してやりける。

(十六) 念佛の僧魔往生の事

むかゝ、美濃國伊吹山に、久く行ひける、聖ありけり。阿彌陀佛よりほかの事知らず。他事なく念佛申してぞ、年へにける。夜ふかく、佛の御前に、念佛申しておたるに、空に聲ありて、つげていはく、なんぢ、ねんごろに、われをたのめり。今は、念佛のかず、多くつもりたれば、あすの未の時に、かならずく、來りて迎ふべし。ゆめく、念佛怠るべからずといふ。その聲をききて、かざりなく、ねんごろに、念佛申して、水をあみ、香をたき、花をちらして、弟子どもに、念佛もろ共に申させて、西に向ひておたり。やうく、ひらめく様にする物あり。手をすりて、念佛申して見れば、佛の御身より、金色の光を

放ちて、さゝ入りたり。秋の月の雲間より、あらはれたるがごとく、さまざまの花をふらふ、白毫の光り、聖の身をてらす。この時、ひびり、尻をさかさまになして、拜み入る。ずゝの緒もきれぬべし。觀音、蓮臺をさゝあげて、聖の前により給ふに、紫雲あつきたなひき、聖はひよりて、蓮臺ののりぬ。さて、西のかたへさりたまひぬ。さて、坊に残れる弟子ども、なくなくたふとがりて、聖の後世を、とぶらひけり。

かくて、七八日過ぎて後、坊のげす法師ばら、念佛の僧に、湯わかいて、あむせ奉らんとて、木こりに、奥山に入りたりけるに、はるかなる瀧に、さゝれほひたる楢の木あり。その木の梢に、さけぶ聲けり。あやしくて、見あげたれば、法師を、はだかになして、梢にまはりつけたり。木のほりよくする法師のほりて見れば、極樂へ迎へら

れ給ひし我が師の聖を、かづらにて、縛りつけておきたり。この法師、いかに、我が師は、かゝる目をば、御覽するぞとて、よりて、繩をどきければ、「いま迎へんずるぞ。そのほど、まほしく、かくておたれ」とて、佛のれは、いままをば、何しに、かく、ときゆるすぞ」といひければ、も、よりて、どきければ、あみだ佛、われを殺す人あり。をうくんとぞ、さけひける。されども、法師ばら、あまたのほりて、ときれろして、坊へぐして行きたれば、弟子ども、心うき事なりと、歎きまどひけり。聖は、人心もなく、二日三日ばかりありて、死にけり。智慧なき聖は、かく、天狗に、あさむかれけるなり。

(十七) 經賴、蛇に逢ふ事

むかひ、經賴といひける相撲の家のかたはらに、ふる川のありけるが、深き淵なるところありけるに、その川ちかく、木かけのあり

ければ、かたひらばかりきて、中ゆひて、あゝだはきて、またふり杖
といふものつき、小童ひとり、どもにぐゝて、どかくありきけるが、
涼まんとて、その淵のかたはらの木かげにゐにけり。淵あをく恐
ろいげにて、そこも見えず。蘆薦などいふもの、生ひいげりたりけ
るを見て、汀近くたてりけるに、あなたの方の岸は、六七たんばかりは、
のきたるらんと見ゆるに、水のみなぎりて、こなたさまに來けれ
ば、何のするにかあらん、と思ふほどに、この方の汀ちかくなりて、
蛇の頭をさゝいでたりければ、このくちなは、大きならんかゝど
さまにのぼらんとするにや、と見たりけるほどに、蛇頭をもた
げて、つくつくと、まもりけり。いかに思ふにかあらん、と思ひて、汀
一尺ばかりのきて、はたちかく立ちて、見ければ、おぼくばかり、ま
もりくく、頭を引き入れてけり。

さて、あなたの岸さまに、水みなぎると見けるほどに、また、こなた
さまに、水浪たちて、のちくちなはの尾を、汀よりさゝあげて、わが
たてる方さまに、さゝよせければ、この蛇、思ふやうのあるにこそ
とて、まかせて、見たりければ、なほ、さゝよせて、經頼が足を、三四
返ばかり、纏ひけり。いかにせんずるにかあらん、と思ひて、たてる
ほそに、纏ひえて、きくく、と引きければ、河に引きいれんとする
にこそありけれ、と、そのをりに知りて、ふみつよりて、たてりけれ
ば、いみじう強く引くと、思ふほどに、はきたるあゝだのはを、ふみ
をりつ。ひき倒されぬべきを、かまへて、ふみなほりて立てれば、つ
よく引くともれろかなり。引きとられぬべくれば、ゆるを、足を、つ
よく、ふみたてければ、かたつらに、五六寸ばかり、足をふみいれて、
立てりけり。よく引くなり、と思ふほどに、繩などの切るゝやうに、

切るゝまゝに水中に、血のさつと、わきいづるやうに見えければ、
きれぬるなりけり、とて、足を引きければ、くちなはの切れ、ひかさ
れてのほりけり。

その時、足にまとひたる尾を、ひきほどきて、足を水に洗ひけれど
も、蛇のあと、うせさりければ、酒にてぞ洗ふと、人のいひければ、酒
どりにやりて、あらひなどして、のちに、從者どもよひて、尾のかた
を、引きあげさせたりければ、大きなりなどもれろかなり、切り口
の大きさ、わたり一尺ばかり有らん、とぞ見えける。頭のかたのき
れを見せにやりたりければ、あなたの岸に、大きな木の根の有
りけるに、頭のかたを、あまたかへりまとひて、尾をさゝれこゝて、
足をまとひて引くなりけり。力の劣りて、中よりきれにけるなめ
り。わが身の切るゝをも知らず引きけん、あさましき事なりかし。

其の後、蛇の力のほど、いくたりばかりの力にかありしと、心みん
とて、大きな繩を、蛇のまきたる所につけて、人十人ばかりして、
引かせけれども、なほ、足らずといひて、六十人ばかり、かゝり
て、引きける時にぞ、かばかりぞ、おほえしといひける。それを思ふ
に、經頼が力は、さは、百人ばかりが力をもたるにや、と、おほゆる
なり。

(十八) 珠の價、量りなき事

これも今はむかし、つくしに、太夫さだしげと申す者ありけり。こ
の比ある箱崎の太夫のりしげが祖父なり。うのさだしげ、京のほ
りしけるに、故宇治殿頼通にまわらせ、又、わたくしの知りたる人々に
も、心ざさんとて、唐人に、物を六七千匹がほど借るとて、太刀を、十
腰を質にれさける。さて、京のほりて、宇治殿にまわらせ、思ひの

まゝに、わたくしの人々に、やりなどして、歸りくだりけるに、淀にて、船にのりけるほどに、人まうけたりければ、これをくひなどして、おたりけるほどに、はし舟にて、あきなひするものども、よききて、うの物や買ふ。かのものやかふなど、尋ねける中に、玉をや買ふといひけるを、聞き入るゝ人もなかりけるに、さだしげが、舍人に仕へけるをのこ、舟のへにたてりけるが、こゝへもてればせ。見んといひければ、袴の腰より、あこやの玉の、大きなる豆ばかりありけるを取り出して、とらせたりければ、着たりける水干をぬきて、これにかへてんやといひければ、玉のぬしの男、せうとくしたりと思ひけるにや。まどひとりて、船さしはなちて、いにければ、舍人も、たかく買ひたるにや、と思ひけれども、まどひいにければ、くやしと思ふく、袴のこゝにつゝみて、こと水干きかへてぞあり

ける。

かゝるほどに、日かずつもりて、博多といふところに、行き着きにけり。定しげ、舟よりれるゝまゝに、物かたりし唐人のもとに、質はすくなかりしぞ。物は多くありしなど、いはんとて、行きたりければ、唐人も、待ち喜ひて、酒飲せなきて、物語りしける。この玉も、ちのをのこ、下す唐人にあひて、玉やかふといひて、袴の腰より、玉をとりいで、取らせければ、唐人、玉をうけ取りて、手のうへにれきて、うちふりて見るまゝに、あさましと思ひたる、顔けしきにて、これは、いくらほどと、ひければ、ほしと思ひたる、顔けしきを見て、十貫といひければ、まどひて、十貫に買はんといひけり。まことは甘貫といひければ、それを、まどひ買はんといひけり。さては、價たかきものにやあらん、と思ひて、たべ、まづと、こひける

を、をーみけれど、もいたくこひければ、われにもあらで、どらせたりければ、いまよくさだめて賣らん」とて、袴の腰に包みて、のきにければ、唐人すべきやうもなく、定一げとむかひたる、船頭がもとに來て、その事どもなく、さへづりければ、この船頭、うちうなづきて、定一げにいふやう、御ずんさの中に、玉もちたるものあり、その玉取りて給はらん」といひければ、定一げ、人をよびて、このともなる者の中に、玉もちたる者やある。それ尋ねて呼べ」といひければ、このさへづる唐人は、しり出で、やがて、そのをのこの袖をひかへて、くは、これぞ、く」とて、引き出でたりければ、さだ一げ、まこと、玉や持ちたる」といひければ、いふく、に、さゝらふよきをいひければ、いで、くれよ」と、こはれて、袴の腰より、取り出でたりけるを、定一げ、郎等して、うらせけり。

それをとりて、むかひおたる唐人、手に入れ、うけとりて、うちふりて見て、たちはしり、内に入りぬ。何ごとにかあらん、と見るほどに、定一げが、七拾貫がちになき、太刀どもを、十ながら取らせたりければ、定一げは、あきれたるやうにて、ぞありける。古水干一つにかへたる物を、そこばくの物にかへて、やみにけん、げに、あきれぬべき事ぞか、玉のあたひは、限りなきもの、といふ事は、今はじめたる事にはあらず。つくしに、だうしせうずといふ者あり。それが語りけるは、物へ行きける道に、をのこの玉や買ふ」といひて、反古のはしに包みたる玉を、懐より引き出で、取らせたりけるを見れば、もくれんじよりも、ちひさき玉にて、ぞありける。これは、いくら」と、問ひければ、きぬ二十匹」といひければ、あさましと思ひて、物へいきけるを

とめて、玉もちのをのこぐて、家にかへりて、きぬのありけるまゝに、六十四ぞ、どらせたりける。これは、二十四のみは、すまじきものを、すくなく、いふがいとほしさに、六十四を取らするなり」といひければ、をのこ、喜びていにけり。

その玉を持ちて、唐にわたりてけるに、道のほど、恐ろしかりけれども、身をもはなたず、まもりなどのやうに、くひにかけてぞありける。悪き風の吹きければ、唐人は、あゝき浪風に逢ひぬれば、船のうち、一の寶と思ふ物を、海に入るなるに、このせうずが玉を、海に入れんと、いひければ、せうずがいひけるやうは、此の玉を、海に入れては、生きても、かひあるまじ。たゞ、我が身ながら、入れば入れよとて、かゝへてゐたりければ、さすがに、人を入れるべきやうも、なかりければ、とかくいひけるほどに、玉うゝなふまじきほうやあ

りけん、風なほりにければ、よろこびて、入れずなりにけり。その舟の、一のせんどうといふものも、大きな玉、持ちたりけれども、其は、すこゝひらにて、この玉には、れとりてぞありける。

かくて、唐に行きつきて、玉買はんといひける人のもとに、船頭が玉を、このせうずが、持たせてやりけるほどに、道にれとてけり。あきれさわぎて、歸りもとめけれども、いづくにかあらんずると、思ひわびて、わが玉をぐて、その玉、れとつれば、すべきかなし。それがかはりに、これを見よとて、取らせれば、わが玉は、これには、劣りたりつるなり。その玉のかはりに、この玉をえたらば、罪ふかゝりなん」とて、かへりけるぞ、さすがに、こゝの人には、たがひたりける。此の國の人ならば、どらざらんや。は。かくて、この失ひつる玉の事を、なげくほどに、あそびのもとにい

にけり。ふたり物がたりけりついでに、^{術歎}むねをさぐりて、など、
 胸はさわぐぞと、とひければ、^{術歎}あかぐの人の玉をれとしてけるが、
 大事なることを思へば、胸さわぐぞと、いひければ、ことわりなり、
 とぞいひける。さて、歸りてのち、二日ばかりありて、このあそひの
 もとより、さしたる事なんいはんと思ふ。今のほど、時かはさずこ
 と、いひければ、何事かあらんとて、急ぎ行きたりけるを、例の、入る
 方よりは、入れずして、かくれの方より、よび入れければ、いかなる
 事にかあらんと、思ふく入りたりければ、これは、もく、それに、れと
 したりけん玉かとして、取り出でたるを見れば、たがはず、その玉な
 り。こはいかにと、あさましくて問へば、こゝに、玉うらんとて過ぎ
 つるを、さる事いひぞか、と思ひて、よび入れて見るに、玉の大
 いなりつれば、もく、さもやと思ひて、いひとめて、よびにやりつ

るなりといふに、こともれろかなり。いづくぞ。その玉もちたりつ
 らんものは、といへば、かこにねたりといふを、よびとりて、やり
 て、玉のぬくもどにわた行きて、これは、あかぐして、そのほど
 に、れとしたり玉なりといへば、えあらがはで、そのほどに、見つ
 けたる玉なりけりとぞいひける。いさよかなる物、とらせてぞや
 りける。

さて、その玉をかへしてのち、唐綾一つをば、唐には、美濃五疋がほ
 どにぞ、もちわるなる。せうずが玉をば、から綾五千段にぞかへた
 りける。そのあたひのほどを思ふに、こゝにては、きぬ六十疋にか
 へたる玉を、五萬貫にうりたるにこそあんなれ。それを思へば、さ
 だしげが、七拾貫が志ちを返したりけんも、れどろくべくもなき
 事にてありけり。と、人のかたりなり。

(十九) 大將慎みの事

これも、今はむかひ、月の、大將星を犯すといふ勘文をたてまつれり。よりて、近衛大將おもくつゝみ給ふべしとて、小野宮^{實頼}右大將は、さまざまの御いのりどもありて、春日社、山階寺などにも、御祈りあまたせらる。うの時の左大將は、枇杷左大將仲平と申す人にてぞ、たはしける。東大寺の法藏僧都は、此の左大將の御祈りの師なり。さだめて、御祈りの事ありなんと、待つに、れども、おたまはねば、れほつかなきに、京にのほりて、枇杷殿にまわりぬ。殿あひ給ひて、何事にて、のほられたるぞと、のたまへば、僧都申しけるやう、奈良にて、うけたまはれば、左右大將つゝみ給ふべしと、天文博士勘へ申したりとて、右大將殿は、春日社、山階寺などに、御いのり、さまざまに候へば、殿よりも、さだめて、候ひなんと、思ひ給へて、案内

つかうまつるに、さる事も、うけたまはらずと、みなく、候へば、れほつかなく思ひ給へて、まわり候ひつるなり。なほ御祈り候はんこそ、よく候はめと、申しければ、左大將のたまふやう、尤もおかるべき事なり。されど、れのがおもふやうは、大將の慎むべしと申すなるに、れのれも慎まば、右大將のため、あうもころあれ。かの大將は、才もかくこくいますかり。年もわかし。ながく、おほやけに仕うまつるべき人なり。おのれにれきては、させる事もなし。年も老いたり。いかにもなれ。なでふ事かあらんと、思へば、祈らぬなりとのたまひければ、僧都、いろいろとうちなきて、百千の御祈りにまさるらん。この御心の定にては、事のれそり、さらに候はむと、いひて、まかでぬ。されば、實に、ことなくて、大臣になりて、七十餘までなん、おはしける。

(二十) 清見原、天皇、大友、皇子と合戦の事

今はむかひ、天智天皇の御子に、大友皇子といふ人ありけり。太政大臣になりて、世のまつりごとを、れこなひてなんありける。心の中に、御門うせ給ひなば、次の御門には、われならん、と思ひ給ひけり。清見原の天皇、うの時は、春宮にて、れは、いま、けるが、このけきを、知らせ給ひければ、大どもの皇子は、時のまつりを、を、世のれほ、江も、おせいも、まうなり。われは、春宮にて、あれば、勢も、及ぶべからず。あやまたれなん。ど、おろり、れほ、して、御門、病つきたまふすなはち、吉野山のおくに、入りて、法師に、成りぬといひて、こもり給ひぬ。

うの時、大どもの皇子に、人申しけるは、春宮を、よ、の山に、こめつるは、虎に、羽をつけて、野には、なつものなり。同じ、宮に、すゑて、ころ、

心のまゝにせめと、申しければ、げにも、とおほして、軍を、と、のへて、迎へたてまつるやうにして、殺したてまつらんと、はかり給ふ。この大どものわうじの妻にては、春宮の御女、ま、ければ、父の殺され給はん事を、かな、み給ひて、いかで、この事、告げ申さん、とおほしけれど、すべきやうなかりけるに、思ひわひ給ひて、鮒のつみ、みやきのありける腹に、ちひさく、ふみをかきて、れ、入れて、たてまつり給へり。春宮、これを、御らんじて、さらで、だに、恐れおほしける事なれば、されば、ころとて、いうぎ、下種の、狩衣袴を、着給ひて、藁沓をはきて、宮の人にも、知られず、た、一人、山を、越えて、きたさまに、れは、しけるほどに、山城國、たはら、といふ所へ、道も、知り給はねば、五、六日に、ぞ、たどる、く、おは、し、着きに、ける。うの里人、あや、く、けは、ひの、け、だ、かく、おほえければ、高つきに、栗

をやき、またゆでなごして、まねらせたり。その二色の栗を「思ふ事かなふべくば、生ひ出で、木になれ」とて、かた山のそへに、うづみ給ひぬ。里人これを見て、あやゝがりて、あるゝをさしてれきつ。うこを出で給ひて、志摩國さまへ、山にうひて出で給ひぬ。その國の人、あやゝがりて、どひたてまつれば、道にまよひたる人なり。のどかわきたり。水のませよ」と仰せられければ、大きなるつるべに、水をくみて、まねらせたりければ、喜びて、仰せられるは、「汝がううに、この國の守と敷とはなさん」とて、美濃國へおはしぬ。

この國のすのまたのわたりに、舟もなくて、立ち給ひたりけるに、女の、大きなる舟に、布入れて洗ひけるに、「このわたり、なにともして渡してんや」と、のたまひければ、女、申しけるは、「一昨日、大伴の大臣の御使といふものきたりて、渡りの船ども、みな取りかくさせ

ていにしかは、これを渡し奉りたりとも、多くのわたり、え過ぎさせ給ふまじ。かくはかりぬる事なれば、いま、軍せめ來らんずらん。いかゞして、のがれたまふべき」といふ。さては、いかゞすべきとのたまひければ、女、申しけるは、「見奉るやう、たゞにはいませぬ人さ敷にころ。さらば、かくし奉らん」といひて、湯ぶねを、うつぶしになして、うの下に、ふせたてまつりて、上に布を多くおきて、水くみかけて、洗ひおたり。まばしばかりありて、兵四五百人ばかりきたり、女に問ひていはく、「これより、人やわたりつる」といへば、女のいふやう、「やごとなき人の、軍千人ばかりぐしておはしつる、今は信濃の國には、入り給ひぬらん。いみじき龍のやうなる馬にのりて、どぶが如くしておはしき。この少勢にては、追ひ付き給ひたりとも、みな殺され給ひなん。これより歸りて、軍をねほくとしのへてこそ、追

ひ給はぬ」といひければ、まことに思ひて、大どもの皇子の兵引き返りにけり。

その後、女に仰せられけるは、「この邊に、軍もよほさんに出できなんや」と問ひ給ひければ、女は「よりまどひて、その國のむねとあるものどもを、催しかたらふに、すなはち、二三千人、兵出で來にけり。其を引きぐいて、大伴皇子を追ひ給ふに、近江國大津といふところ、追ひつきてたゞかふに、皇子の軍破れて、ちりぐに逃げよるほどに、大伴皇子、つひに、山崎にてうたれ給ひて、頭をとられぬ。それより、春宮、大和國に歸りおはしてなん、位につき給ひける。田原にうづみ給ひし、焼き栗、ゆで栗は、形もかはらず、生ひ出でけり。今に田原の御くりとて、たてまつるなり。志摩の國にて、水めさせたる者は、高階氏のものなり。されば、うれが子孫、國守にては、ある

なり。うの水めたりつるべは、いまに薬師寺にあり。すのまたの女は、不破の明神にてまゝけり、となん。

(廿一) 頼時が、胡人見たる事

今はむかひ、胡國といふは、唐よりも、はるか北と聞くを、奥州の地に、つゝきたるにやあらん、とて、宗任法師とて、つくりにありしが語り侍りけるなり。この宗任が父は、頼時とて、みちの國のえびすにて、れほやけに従ひ奉らずとて、せめんと、せられけるほどに、「いにしへより、今にいたるまで、れほやけに、勝ちたてまつるものな。われは過たずと思へども、責をのみかうぶれば、はるくべきかたなきを、れく地より、北に、見渡さるゝ地あんなり。うこに渡りて、ありさまを見て、さてもありぬべき所ならば、われに従ふ人のかざりを、みな、おてわたして住まん」といひて、まづ、船一つをどゝ

のへて、それののりて行きたりける人々、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、さてはまた、むつまじき郎等ども、二十人ばかり、食物、酒など、多く入れて、舟を出だしてければ、いくばくも、はらぬほどに、見わたらぬなりければ、渡りつきにけり。

左右は、はるかなるあり原ぞありける。大きな川の湊を見つけて、うの湊に、さし入りにけり。人や見ゆる、と見けれども、人げもなし。陸のほりぬべき所やある、と見けれども、あり原にて、道ふみたる方もなかりければ、もし、人げする所やある、と、川をのほりさまに、七日までのほりにけり。うれが、たゞ、同じやうなりければ、あさましきわざかな、とて、なほ廿日ばかり、のほりけれども、人のけはひもせざりけり。三十日ばかり、のほりけるに、地のひくやうに、おぼければ、いかなる事のあるにか、と、おそろく、あり原に、さ

しかくれて、ひくやうにするかたを、のぞきて見ければ、胡人として、繪にかきたる姿したるもの、あかき物にて、頭ゆひたるが、馬に乗りつれて、打ち出でたり。

これは、いかなるものぞ、と、見るほど、うちつゞき、數へらず、出できにけり。河原のはたに、あつまり立ちて、聞きも知らぬ事を、さへづりあひて、河に、はらくとうち入りて、渡りけるほどに、千騎ばかりやあらん、とぞ見えわたる。これが足おとのひくきにて、はるか、聞えけるなりけり。かちのものをば、馬ののりたるもの、うばに、引き付けくして、渡りけるをば、たゞ、かちわたりする所なぬり、と、見けり。卅日ばかりのほりつるに、一どころも、瀬なかりに、川なれば、かれころ、わたる瀬なりけれ、と、見て、人過ぎてのちに、さしよせて見れば、同じやうに、うこひも知らぬ、淵にてなんありけ

る。馬筏をつくりて、およがせけるに、かち人は、うれにとりつきて、渡りけるなるべし。なほのほるとも、はかりもなくおほえければ、恐ろしくて、うれより、歸りにけり。さて、いくばくもなく、てぞ、頼時は、失せにける。されば、胡國と、日本のひがりのおくの地とは、さゝあひてぞあんなると、申しける。

(廿二) 賀茂祭のかへり、武正、兼行、御覽の事

これも、今はむかひ、賀茂祭のとも、に、下野、武正、秦、兼行、つかはし、たりけり。そのかへさ、法性寺殿忠通、紫野にて、御覽とけるに、武正、兼行、殿下、御覽すと知りて、ことに引きつくろひて、わたりけり。武正、ことに氣色してわたる。次に、兼行またわたる。おのく、とりくく、いひいらず。殿、御覽じて、今一度、北へわたれと、仰せありければ、また、北へわたりぬ。さて、あるべきならぬば、また、南へかへりわたるに、

このたびは、兼行、さきに南へわたりぬ。次に、武正わたらんずらんと、人々まつほどに、武正、やゝ久く見えず。こはいかにと、思ふほどに、むかひに引きたる幔より、東をわたるなりけり。いかにくと、待ちけるに、幔より、冠のこぼかり見えて、南へわたりけるを、人々、なほ、すぢなきものゝ心きはなりと、ほめけり、とか。

(廿三) 門部、府生、海賊射返す事

これも、いまはむかひ、かごべの府生といふ舍人ありけり。若く、身はまづくくて、ぞありけるに、まゝきをこのみて射けり。よるも射ければ、わづかなる家の、ふき板をぬきて、ともして射けり。妻も、この事をうけず。近邊の人も、あはれ、よゝなき事、おたまふものかなと、いへども、我が家もなく、まといんは、たれも、何かくるゝかるべきとて、なほ、ふき板をともして射る。これをうらぬもの、ひと

りもなく、かくするほどに、ふき板、みな失せぬ。はてには、たるき、こまひをわりたきつ。また、後には、棟、うつぼり、焼きつ。後には、けた、柱、みな、わりたきつ。これ、あさましくきもの、よさまかな」といひあひたるほどに、板、じき、おたげたまでも、みな、わり焼きて、となりの人の家に、やどりけるを、家主、この人のやうだいを見るに、この家も、こぼちたきなんぞ、と思ひて、いとども、さのみこそあれ、まち給へ」などいひて、すぐるほどに、よく射るよきこえありて、めい出だされて、賭弓つかうまつるに、めでたく射ければ、叡感ありて、はてには、相撲の使にくだりぬ。

よき相撲ども、多く催し出でぬ。また、數しらず、物まうけて、のほりけるに、かはね島といふ所は、海賊のあつまる所なり。過ぎ行くほどに、ぐいたるもの、いふやう、あれ御覽候へ。あの舟どもは、海賊

の舟どもにこそ、候ふめれ。こは、いかせさせ給ふべきといへば、此のかどべの府生、いふやう、をのこ、なさわざう。千萬のかいぞくありとも、いま見よ」といひて、皮子より、賭弓の時、着たりける装束とりいで、うるはしくおやうぞきて、冠、老懸など、あるべき定にいければ、従者ども、こは、物にくるはせ給ふか。叶はぬまでも、楯づきなど、給へか」といりめきあひたり。

うるはしくとりつけて、かたぬぎて、めて、うしろ、見まはして、屋形のうちへに立ちて、今は四十六ぶに、よりきにたるか」といへば、従者ども、大かた、とかく申すに及はず、とて、黄水をつきあひたり。いかにかく、よりきにたるか」といへば、四十六ぶに、ちかづきさぶらひぬらん」といふ時に、うは屋形へいで、あるべきやうにゆだちて、弓をさしかぎして、おぼしありて、うちあげたれば、海賊が宗と

のもの、くろばみたる物きて、赤きあふぎをひらきつかひて、とくくこぎよせて、乗りうつりて、うつりとれといへども、この府生、さわがずして、引きかためて、とろくと、はなちて、弓たふして見やれば、この矢、目にも見えずして、宗どの海賊が、わたるところへ入りぬ。はやく、左の目に、いたづき立ちにけり。

海賊「や」といひて、あふぎをなげすて、のけさまにたふれぬ。矢をぬきて見るに、うるはしく、戦ひなどする時のやうにもあらず、ちりばかりの物なり。これを、この海賊ども見て、「や、や、これは、うちある矢にもあらずりけり。神箭なりけり」といひて、「とくく、おのくこぎもどりぬ」とて、にげにけり。うの時、門部府生うすわらひて、「なにがいらがまへには、あぶなく立つ、やつばらかな」といひて、袖うちれろして、こつばきはきて、おたりけり。海賊さわぎ逃げたるほ

どに、ふくろ一つなど、少々物どもれとしたりける、海にうかびたりければ、この府生とりて、わらひておたりける、とか。

廿四後の千金の事

今はむかし、もろこしに、莊子といふ人ありけり。家いみじうまつしくて、けふの食物たえぬ。となり、監河侯といふ人ありけり。それおもとへ、けふくふべき料の粟をこふ。河侯がいはく、「いま五日ありておはせよ。千金の金をえんとす。それを奉らん。いかでか、やんごとなき人に、けふまねるばかりの、粟をたてまつらん。返すくおのがはぢなるべ」といへば、莊子のいはく、「昨日、みちをまかりしに、あどのよばふて急あり。かへり見れば、人なし。たゞ、車の輪のあどのくほみたる所に、たまりたる、少しばかりの水に、鮒一つふためく。なにぞの鮒にかあらん」と思ひて、よりて見れば、すこ

「ばかりの水に、いみじう大きな鮒あり。なにぞの鮒ぞ」と問へば、鮒のいはく、『われは河伯神の使ひに、江湖へ行くなり。うれが、どひそこなひて、この溝におちいりたるなり。のどかわき死なんとす。われをたすけよ、と思ひて、よびつるなり』といふ。答へていはく、『われ、今、二三日ありて、江湖もどいふところ、あろびいかにんとす。うこれ、もて行きてはなさん』といふに、魚のいはく、『さらに、うれまで、え待つまじ。たゞ、けふ一提げばかりの水をもて、のどをうるへよ』といひいかば、さてなん、たすけい。鮒のいひいこと、わが身に知りぬ。さらに、けふのいのち、物くはずば、いくべからず。のちの千のこがね、さらに益なくとぞいひける。うれより、のちのせんきんといふ事、名譽せり。

宇治拾遺物語抄下巻終

明治二十八年十一月廿五日印刷
 明治二十八年十一月三十日發行

版權
 所有

編纂者

東宮鐵眞呂

東京市淺草區
小島町五十七番地

發行者

江島金太郎

東京市淺草區
諏訪町六番地

印刷者

熊田宜遜

東京市神田區
三丁目二十五番地

發行所

萬笈閣

東京市淺草區諏訪町六番地

椀屋書店